

これも一つの方法だよ。何年もたった後で、「あのとき何でオレ、書けなかったんだろう？」って考えてくれる。それが大切。これでいい。

「のんびり。だ^{ちやくじつ}けど着 実に。今、結果が出なくていい。」こんな気持ち、何か忘れてたなあと反省です。



◆右のページに、1月7日付で徳島新聞に掲載され
ていた先輩の頑張りを載せます。将来への進路選択に向けて、みなさんの参考になれば……。

◆先日、部落問題が学べる、すごい資料に出会いました。多少難しいかもしれませんが、本号から裏面2ページにわたって連載するので読んでみてください。特に大人のみなさん！読んでみてください！スミマセンが先生方は、子どもたちに少しの説明をお願いします！！

◇ これからの日程 ◇ ◇ ★ ☆ ☆ ★ ★ ★ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ★ ★ ★ ☆ ☆ ★

- 1月29日(月) 学習会解放子ども会小中合同一夜研修事前学習会(16:30～;総合センター)
28日(日) 生光学園高等学校入学試験
2月3日(土) 学習会解放子ども会小中合同一夜研修(14:00～;総合センター他)



第2回ポエムランド賞

阿部 晋也君(2年)に

「どどけ」

阿部 晋也

顔も名前も
知らないのに
かきおくりをいたしました
たんぽぽみたいでしたから
どこへ行ったかわかりません
偶然開いたページの中の
忘れたくない一行みたい
感じたとおり
そのままで

阿部 晋也君(17)



昨年一年間、「ニちゃん」ポエムランドに入選した詩の中から最も優れた作品に贈られる「第2回ポエムランド賞」に、板野高二年・阿部晋也君(17)が選ばれた。選考は「ポエムランド」の清水恵子さん。阿部君には賞状と記念品が贈られる。

選評

清水 恵子

ポエムランド賞は作品賞か詩人賞か、はたまた完成度か将来性かと、ずいぶん悩みました。観点が変れば受賞作も変わってくるからです。二〇〇〇年の入選作品に贈られる「第2回ポエムランド賞」に、板野高二年・阿部晋也君(17)が選ばれた。選考は「ポエムランド」の清水恵子さん。阿部君には賞状と記念品が贈られる。

言葉の暗示性を評価

阿部さんは省略の高手。余計な説明を書くことなく、読者に想像の余地を残すという手法です。好みの分かれる作風ですが、言葉の暗示性をよく心得ている点を評価しました。受賞作

に望みたいのは、独りよがり的な、いわゆる現代詩。に毒されないように、ということ。多くの詩を讀み、個性と真実の遠いを学んで下さい。

昨年、最も意欲的だったのは福原久恵さん。さまざまなスタイルに挑戦しながら、広く鋭く世の中を見つめた、スケールの大きな詩を書きました。教訓的な天性を感じます。今後も詩を書いていくに違いない彼

みな人です。

石川龍子さん、藤原理恵さん、七梨聖林さんの個性も捨て難いものがありましたが、今回の受賞者大原サトシさんが投稿を続け、「ポエムランド」を盛り上げてくれたのもうれしかったです。

残念なのは、何度か落選する投稿をためてしまう人がいることです。さまざまな場面で、落選を重ねながら成長した先輩詩人はたくさんいます。どうかがんばってください。

(詩人)

「自分が自分と選ばれるとは思ってなかった。この作品は、もしもいたら内容が競者にならなかつたか。と心配し

を感じたからだ。受賞作は、その「忘れたくない一行」に出合った喜びを表現した。「偶然開いたページの中の人物にしたためた手紙のよう

浮かんだイメージ大切に

詩だといふ。詩を始めたのは「ポエムランド」がきっかけ。社会の出来事や「自分」がどんな場所や生活しているのか知りたくなつて」と、昨年から新聞を讀み始めた。そこで昨年のポエムランド賞受賞者・大原サトシ君の作品「真夏」を讀んで感動。自分も詩を書いてみたいと思つた。以来、毎月投稿を続ける常連の一人。

「頭で浮かんだイメージをそのまま書くようにしてから、おもしろい表現ができるようになったと思ひます」

通学の途中や家でテレビを見ていて、きい言葉が思ひ浮かんだら、すぐにデジランの裏面に書きためておく。「そんなときは首の後ろがぞくぞくするんだよ」。

女性たちの

「生きる」闘い ①

はじめに

同和地区住民の多くが、日常の生活を送る上で、さまざまなハンディを背負わされている。そのハンディには、目に見えるものもあるが、目には見えないものが一杯ある。「子育てのノウハウ」「生活様式」「人間関係の作り方」「余暇の過ごし方」「人生設計の持ち方」「価値観」等、決して目にするものの出来ないところに入り込んだハンディがある。ハンディを生み出しているものが、部落差別である。

日常生活の至る所に差別は進入し、隅々にまで浸透し、目に見えないハンディを作り出していく。「他人が自分のことをどういう風にみているか」を常に意識しないと新しい人間関係がつかれない。これも差別が作り出しているハンディである。

例えば、PTAで子どもの同級生の母親と出会う。その母親に言われる。「今度は非家にも遊びにいらしゃってください」と。その瞬間考えてしまう。「この人は、自分が地区の人間だと知ってるのだろうか」と。

地区外の人は、これを聞いたら、きっと「それは少し考えすぎなんじゃないか」と思うであろう。中には、悪意を持って、

「ひがみつばい態度だ」と決めつける人もいるかもしれない。

しかし、そうではない。地区住民にとって、そのように考えさせられてしまうハンディが、差別の結果作り出されているのだ。こういつた目に見えないハンディを通して作られている不安を、一応「文化的不安」という言葉でくくることにする。

この「文化的不安」を取り出すために、ここでは、地区の女性に焦点を当てる。なぜなら、女性を取り巻く問題を論じたものはほとんどないからである。被差別部落の女性は、男性と比較して「女性差別」と「部落差別」という二重の差別を受ける。

故に、男性以上にその日常は、差別的状況に取り巻かれていくといっても過言ではあるまい。

ここでは、地区のある若い母親を取り上げる。彼女(A)に対する聞き取りインタビューを軸として展開する。

インタビュアーでは、彼女のライフヒストリー(生活史)を丹念に聞いていった。幼年期から始まり、学校生活、結婚し母親になって、一生懸命生きていく現在の状況までを聞き取りした。その中には、部落差別が如何に日常の隅々にまで入り込み、彼女の精神はもちろん身体まで苦痛を与え続けてきたのかという話が、一杯詰まっている。

聞いていて、しんどくなるような話しもあった。彼女自身「語りたくない」話しもし

てくれた。

彼女の話の軸に展開することが、彼女のプライバシーに入り込み、彼女自身を傷つけることになりはしないか、という心配もした。しかし、彼女の話の中に、まさに被差別部落の抱えている現実がある。キレイゴトで論述するわけには行かない。それが、彼女の話の聞かせてもらった私たちの礼儀である、と考える。それと、彼女自身、凄まじい差別の中で、それと闘い、それを克服してきた生き方を示している。だからこそ、彼女の「生の声」を通して語られた話を、ここでの基本的材料にする。

彼女の生活史の中での出来事は、当然彼女の解釈に基づいて意味づけられて、語られる。それを、そのまま(インタビュアーの解釈を入れない形で)使う。ここで重要なのは、「語る人自身の意味付け」である。その意味で、ここでの記述を支える材料は、非常に限定されたものになる。ただ、Aさん以外の多くの地区の女性の「聞き取り」も行ったので、随時それらの「聞き取り」の材料も使っていく。

但し、あくまでも、Aさんへの「聞き取り」がメインである。

以下の記述の順序について、簡単に触れておく。

する。次の通りである。

第一ステージ：部落差別との出会い。

第二ステージ：結婚差別

第三ステージ：部落差別と家族

第四ステージ：これからの展望

以上の4ステージ(段階)である。以下、これに従って記述を進めていく。

第一ステージ：部落差別との出会い。

小学校時代

〈物心ついた時には出会っていた〉

Aさん。30代の女性。彼女は部落差別とどのように出会ったのであろうか。

「私が(部落であることを)自覚する前に親が言うてたから。部落じゃなんじやいうて父親と母親がいつもケンカしてました。とくにわかってたんですよ。だから、私ももう自分が自覚する前に部落という言葉、知ってました」

彼女と「部落」との出会いには、両親のケンカから始まった。激しい口論のなかに出てくる「部落」という言葉。それは、一体何なのか。

その意味を知りたくて、彼女は小学校一年生の時に学校の図書館で「部落」について調べたという。まだ、小学校の一年生である。

「エタとか新民とか、父親が怒鳴っていた言葉を図書館で調べたりして。で、わかったんです。ある程度は。でも、としてあ

なはず、いいケンカをするのかは、ようわからなかった。そして、ある日母が言うたんです『お母ちゃんは部落で、お父ちゃんも部落でないけえ、こんなことになつてゐるんじゃ。あんたは解放運動して、ああいう男とは結婚するな』って。」

「部落」という言葉は、彼女にとって父親と母親とのケンカの原因であつた。父親が使う常套語であつた。

両親のケンカの絶えない家の中で、物心つくと同時に、彼女は「部落」に出会つてゐたのだ。正確にいえば、「部落差別」と出会つてゐたのだ。

しかし一方で、同じ地区出身の30代女性、Bさんの場合は全く異なつた出会いをしてゐる。Bさんが、自分の部落差別との出会いについて語つた。

「私の場合、父親が運動に熱心だったので、小さい頃から気がついたラゼケン登校とかしてたし。それこそ、解放子ども会にも保育所から行つてましたから。……だから自然に知つたという形ですかね。そう、改めて知つたというわけじゃないんですけど。今となつては、それがよかつたのかと思ひます。」

このAさんとBさん。共に地区出身でありながら、しかも同世代でありながら、部落差別との出会いは180度異なる。

両親のケンカの原因として出会つた部落差別。

解放運動という、差別と闘ふことを通して出会つた部落差別。

この二人の出会いには、地区の子どもが部落差別と出会うときの典型的なケースでもある。一方はマイナスの典型、他方はプラスの典型である。

Aさんは「下位文化」の中で、Bさんは「対抗文化」の中で、部落差別と出会つた。それぞれの家庭、特に両親の「生き方」が子どもにストレートに反映してゐる。（「下位文化」「対抗文化」については、別途記載）

「家族の中に部落差別を見た」

Aさんは、自分の生い立ちを語り始めた。子どもの頃、両親が離婚。父親が地区外、母親は地区出身。彼女が体験したのは、家族のなかで繰り広げられた部落差別である。「私の両親は、母が部落で、父は部落でなくて、二人は結婚したんだけど父親は酒乱だったんです。お酒を飲めば、ただ暴れるとか暴力を振るうとかだけじゃなくて母にたいして『お前は、ド市民だ、エタなんだ』と凄じくなるんです。」

淡々と語つてゐるが、その話の中身は凄じい。両親のケンカの中身は、部落差別そのものだった。

彼女は子ども心にも、母親を差別する父親に対して、憎しみを抱いていく。「父が母を差別する」現場にいる子ども。家庭の

中に入り込んで、幼い子どもにまで襲いかかる差別。

「私、母親にいましたよ『もう、別れてよ。あんなお父さんいらんけえ、別れて』って。そしたら、母が『あんたが小さいうちは父親いふのは必要だから』って言うたんだけど、『どこがゐるん、あんなお父ちゃんおらんほうがええじゃない』って。小学校低学年の時から、母に『別れて、別れて』ってずっと言ひよつたですよ。」

彼女は、小学校低学年にして父親に見切りをつけていく。子どもの持つ鈍いまなざし。直感的に感じた差別への嫌悪感。「差別を許さない」感性を、幼くして身につけてゐた。

「怖かつた、逃げ出したかつた」

そんなお酒を飲んでは、母親に罵倒を浴びせかけ、なじる父親との生活は、彼女に言わせると「最低の子ども時代だった」と。「それこそ、もう、ケンカになると包丁が飛びかうような家だったから。『殺す、殺さん』いうて、しょっちゅう言うんですよ。狭い家だったし、6畳一間と台所しかないんで、台所でガタガタ言ひ出したら、全部聞こえる。」

今でこそ語れる話である。

部落差別は、彼女から楽しいはずの子どもの時代を奪つた。彼女は、両親の愛情からは無縁のところ、常に大人の顔色を伺ひ

ながら、ビクビクし、差別の渦巻く家庭のなかで育つた、という。

「死んでしまいたい」

争ひの絶えない家のなかに彼女の居場所などなかった。

何かあると、彼女は隣の祖父母の家に避難する。祖父母は、優しくあつた。

「とにかく何かあれば靴を持って逃げろいうね、そんな毎日で、近所の人とかも、私が走つて出るのがわかるから、『おいで、おいで』言うてくれて。安眠出来るような家じゃなかつたんです。」

そんな毎日が、子どもにとって楽しいはずはない。彼女はだんだん精神的に追い詰められていく。友達をみても、誰も自分のような思いを抱えてゐる子は見当たらない。仲の良い両親を持つ友達がうらやましくて、心はどんどん荒んでしまふ。

小学生の彼女には重たすぎるものを抱え込まれた時、ついに「死ぬこと」をも考えはじめる。

「どうしても、家に帰つてもおもしろくないし、じゃあ、死のういうところまで思ひてゐるの考へて、どうしたら死ぬるか。でも、いろいろ考へるんだけど、死ねないんですよ。怖くて。家の近くの池に入つてみたり、カミソリを持ち出してみたり、いろいろしましたけど……。」

次号へつづく